



鎮守の森だより

NPO法人社叢学会ニュース

第75号

2015年5月1日

平成27年度年次総会研究発表・シンポジウム

海と森の文化を考える 大陸との窓口宗像で

5月31日(日)午前10時から海の道むなかた館(宗像市)で

5月31日(日)に宗像大社に隣接する「海の道むなかた館」(宗像市)で開催される今年の年次総会・研究発表・シンポジウムの概要が別紙(3頁)の通り決まった。

総会には大会実行委員長の高向正秀・宗像神社宮司、社叢学会福岡県支部長を務める西高辻信良・福岡県神社庁長・太宰府天満宮宮司が顔を揃える。研究発表に引き続いて行われるシンポジウムのテーマは「森と海の文化 暮らし・いのり・自然」で、基調講演には三輪嘉六・前国立九州博物館館長が、パネルディスカッションでは森本幸裕・社叢学会理事・京都大学名誉教授、味酒安則・太宰府天満宮禰宜、前迫ゆり・社叢学会理事・大阪産業大学教授が、櫻井治男・社叢学会理事・皇學館大学教授のコーディネートのもと、森と海の信仰と水の循環などについて議論する。

前日(30日)の見学会では、宗像大社正式参拝の後、古代祭祀の跡と言われる高宮祭場などを見学する。さらに神湊から大島に渡り、中津宮、沖津宮遥拝所、御嶽神社などを参拝、再び辺津宮に戻って沖ノ島の古代祭祀跡から発見された神宝を展示する神宝館を拝観する。この日は一日、葦津敬之・宗像大社権宮司から説明を頂くことになっており、古来、ユーラシア大陸への窓口として海陸交通の守護神を崇敬してきた宗像大社を深く理解することができる。

東日本大震災依頼、海と森の信仰への関心が高まっている。今回の大会は、海と森を敬い、循環する水の恩恵を受けながら暮らしてきた日本人の原点を探る2日間となるだろう。

なお、正会員で総会にご欠席の方は必ず委任状をお送り下さい。

進士五十八顧問が第9回緑の学術賞を受賞

「日本庭園と農の融合による“みどりのまちづくり”の計画・政策・実践」に関する功績で

本学会顧問の進士五十八氏が、第9回緑の学術賞を受賞した。これまで分子生物学などの専門家の受賞が多く、造園の分野での氏の業績が高く評価されたことに対して、これからもランドスケープの視点の重要性を訴えていきたいと、さらなる活動への意欲を燃やしておられる。

特に高く評価されたのは、日本庭園について、従来の人文科学的なアプローチではなく、自然科学的手法を用い、日本庭園が農業技術を基礎とし、また自然との共生により育まれてきたわが国の「農の風景」が凝縮されたものであることを明らかにした上で、景観の保全や都市農業の復権に向けた市民活動の重要性を説き、

市民農園や里山ボランティア等の底流を形作るなど、みどりに対する国民の理解増進に大きく寄与した点。

1960年代以降、自然が駆逐されていく中で、人間も生態系の秩序の中で自然との共生への道筋を見出していかなければならないとの観点から、「農」を都市の社会的共通資本として位置づけたこの理論が多くの市民の共感を得た背景には、日本庭園研究を基盤とした確たる手法と環境の世紀に向けたライフスタイル提案との融合がある。

なお、業績の詳細はHPに掲載している。トップページのお知らせ欄からご覧いただきたい。



森林文化と文明開化 ～香春岳と武甲山をめぐる課題～

講 師：藺田 稔(社叢学会理事長・京都大学名誉教授・秩父神社宮司)

文明と文化 文明開化という非常に大きなテーマを設定したが、そもそも文明と文化は区別しなければならない。文化は土着の、それぞれの地域での人間の営みの総合であり、文明は、大地を離れた普遍的な都市に生まれた人間の総合的な営みである。

日本は大陸からの文明を受け入れながら歴史を形成してきた。文明開化は古代にもあり、特に仏教の伝来は大きな文明開化であった。大陸から仏教が文明開化として入ってきて文化的に成功したが、これには仏教の寛容性あるいは多神性が大きく与っている。本来、宗教は破壊しながら分布するのだが、仏教は土着の宗教と習合しながら広がってきた。インドやチベット、日本など、それぞれの仏教はそれぞれに違っている。文明としての性格は普遍的でも、土着の神道と習合し、日本化したといえよう。

神道も仏教に育てられたといえる。飛鳥・奈良・平安の先進的な仏教を咀嚼しながら日本化し、明治維新までは共存していたのだが、明治維新は欧米を手本とした近代化・合理化である。文明は普遍性を実証するのであり、広がるのが本質である。文明開化とは、象徴性を否定し、事物そのものに注目する世俗化だといえる。明治の文明開化も科学技術が伴った強力な世俗化であり、物事の象徴性を払しょくし、モノそのものを科学技術的な素材として見る。石や岩は石材であり、裸にして材料を物質的に使うということだ。これは伝統文化への破壊を意味する。

香春(かはら)神社の場合 香春町は博多の30kmばかり東に位置し、北側は有名な炭鉱地帯であった。一ノ岳、二ノ岳、三ノ岳という3つの峰を神体山としていたが、一ノ岳からは良質の石灰が算出し、二ノ岳、三ノ岳からは銅が産出した。

香春神社の主祭神は辛国(からくに)息長大姫大目、忍骨、豊比咩で、古墳時代以前に新羅から先進的技術を持った人々が渡来し、銅の採掘開発を行ったのであろう。709(和銅2)年に山頂の三社を現在地に移設したのが現在の香春神社で、先年、創建1300年を迎えた。香春は、九州の北端に位置し大陸交通の窓口となった宗像から宇佐神宮に入る重要な街道で、古代には非常に栄えていた。遠賀川水系の金辺川(きべがわ)のほとりにあることから、清らかな川の河原に

鎮まったというのも由緒の一つだと思われる。

ここには最澄が唐に渡る前後に参拝しているが、それも大陸に縁のある神社であるからだろう。ところがこの由緒ある神社の神体山である一ノ岳山頂が、セメント工業によって半減させられてしまった。現在、セメント採掘は終わっているが、石灰石の採掘は続いており、状況を確認めようにも、登ることはできない。**秩父神社の場合** 秩父は河岸段丘の盆地で、社叢はケヤキやナラ等の落葉広葉樹中心で柞(ははそ)の森と言われる。「ははそ」には実がたくさんなるという意味がある。神体山は武甲山で、ヤマトタケルが東征の折に甲冑を埋めたことからきた名前だという説もあるが、向(むこう)山がやがて「ぶこう」になったのではないかと思っている。向山は里の人が霊山として遥拝する向うの山という一般名詞で、秩父神社も盆地の南の端に屏風のようにある武甲山を神体山として遥拝してきた。通常は山を背後に、前が集落という位置関係なのだが、ここでは山に直面して神社がある。

大正末期に大規模なセメント採掘が始まり、山頂から効率的に削るために山頂にあった御嶽神社を南に移動させた。秩父太平洋セメント(株)の社長を務めた稲垣實氏は、「残壁の造成は新たな武甲山の造成」との考えから武甲山の修景に尽力された。現在、採掘会社が山壁に10mおきにベンチを作って植林しているが、法面が急峻なので木が大きく育たないと山を覆う緑ならぬし、天水に頼っているの、今一つ生育状態よろしくない。そのため、採掘会社による植林に加え、武甲山再生フォーラムを作って植林を進めている。

コスモロジーの修復 香春岳も武甲山も、工業化の中で採掘対象になったのだが、採掘に対する抵抗はあまりなかったようで、文明開化の力の強さを実感する。香春町史からは、むしろ積極的に誘致したことがうかがえる。香春町は、古くは栄えたが近代になって疲弊し、町の再興への期待があったのだろう。現宮司も過去の責任を問うわけにいかないとおっしゃっている。

武甲山も同じで、江戸時代の文書からは、地元民の共有林になっていたことがわかり、山は活用されざるを得ない存在だったといえるのだろう。

では、現代文明が崇敬の対象を破壊するという状況をどうすればよいのだろうか。土地のコスモロジーと

次回予告【第66回関西定例研究会】

- ◆日 時：7月25日(土) 13:30~15:30
- ◆場 所：伏見稻荷大社(京都市伏見区藪ノ内町68)
- ◆テ マ：社叢研究40年の成果—照葉樹林研究—
- ◆話題提供：服部 保(兵庫県立大学名誉教授)

して修復するにはどうすればよいのだろうか。

元の姿には戻せないのだから、象徴性をどう再構成するかが問題だ。地元には、武甲山に対して故郷の山という気持ちはあるが、崇拜するには至らない。そこで、武甲山を正面に拝する御旅所の再構成を考えている。森と鳥居を配し、神聖な場所としての造形をすることで意識を変える。さらに山頂に奥宮を作ることも必要だ。これには地元民も賛同している。

近代の文明開化で物質的には豊かになったが、地元が誇りに思ってきたふるさととしての景色を失った。これを再興すれば観光面でも魅力となり得る。

大都市の後背地である中山間地が安定しなければ環境は守れない。文化的な魅力があれば中山間地はよみがえる。特に東日本大震災後、コミュニティと象徴性、家郷性が再構成できるかが大きな課題であろう。（当日資料と香春岳写真をHPに掲載）

第63回 関東定例研究会 報告

2015年2月21日
(於 國學院大學)



「鎮守の森コミュニティ活動」の現状

講師：宮下 佳廣(一社 鎮守の森コミュニティ推進協議会代表理事・
森林インストラクター)

鎮守の森コミュニティ活動の背景 日本は世界150カ国の中で人口が第10位、面積は62位で、人口密度の高い国である。経済的に豊かでありながら、幸福度は低いともいわれている。『創造的福祉社会』(広井良典)によると、人類の歴史を「拡大、成長」と「成熟、定常化」という視点で眺めかえすと、(1)人類誕生から狩猟時代、(2)1万年前の農耕成立以降、(3)200年前以降の産業化/工業化時代、の3つの大きなサイクルを見出すことができる。これは、人口増加・定常化のサイクルとも重なり、現在の世界は数百年単位の大きな曲がり角に立っている。

定常型社会とは、人口と経済の成長が限界に達した社会、生産の膨張をこれ以上は求めない社会のことであり、定常型社会論は高齢化と人口定常化の観点を加え、一切の成長を断念し、「成長なき社会」への軟着陸を目指しており、21世紀を長い人類史の中に位置付け、現代が過去に例のない崖っぷちに立っているという強烈な危機意識がある。また、定常化の時代は文化的創造の時代であり、各地域の風土的多様性や固有の価値観が再発見されていくだろう。

鎮守の森コミュニティ研究所は地域住民と協力し、その地域にとって古くから精神的なつながりの中核であった鎮守の森等の再評価を通じ、地域コミュニティを再生することで、そこに住む人々の経済的、文化的な生活の質の向上を図り、地域の発展に寄与することを目的としている。

鎮守の森コミュニティの活動内容 本研究所は、自然エネルギーやスピリチュリティ(物質的なものを超えた精神的価値)と一体になったローカルコミュニティの拠点としての鎮守の森を軸として、自然エネルギ

ーやケア、地域再生との関わりなど、現代における新たな意義と可能性を具体的な活動とともに探求し、積極的な働きかけを行っている。久伊豆神社(埼玉県)では、緊急時のエネルギー確保のため、自然エネルギーの利用を推進する事業として、社務所の屋根に太陽光発電パネルを設置した。自然災害等で大規模な停電になった際、集会所を避難場所として活用するための非常用の電源を確保し、行政に頼らない“神頼み”的な役割を担うことをねらいとしている。

進行中の案件として、護山神社(岐阜県)では、小水力発電、水車の復元、生物多様性保全などの活動が、里地里山等地域の自然シンボルと共生した先導的な低炭素地域作りのための事業化の策定として環境庁に採択された。また、秩父神社(埼玉県)では、氏子青年会と「秩父丸ごと博物館」を中心に活動しているシニア世代とをつなぎ、「秩父の自然信仰がつなぐ山の再生-町のにぎわい」としてコミュニティ再生事業援助をトヨタ財団に申請中である。榛名神社(群馬県)では、小水力発電について氏子総代との折衝をはじめている。

一方、常陸国総社宮(茨城県)をはじめ、鎮守の森セラピーを開催している。神社参拝、作法や由緒の説明など聞きながら境内を散策したり、気功や瞑想を行いながら鎮守の森で過ごすというもので、参加者には前後で血圧を測定し、体調の変化を感じてもらう。また「鎮守の森セラピーへようこそ」という紙芝居を作成し、植物が人にもたらす影響、効用についてわかりやすく、身近に感じられる形で紹介している。現在、日本森林インストラクター協会と社叢学会との共催で、鎮守の森でセラピー指導者養成研修会の開催を計画中である。(文責・渡邊 節子)

次回予告【第65回関東定例研究会】

- ◆日 時：7月4日(土) 13:30~16:30(予定)
- ◆場 所：國學院大學渋谷キャンパス120周年記念2号館1階 2104教室
- ◆テ - マ：神社と狩猟神事・農耕儀礼(仮称)
基調講演：奥三河山村のシカウチ神事伝承の現況と課題(講演者交渉中)
シンポジウム：奥三河のシカウチ神事の本義と変遷(発題者交渉中)
- ◆上映：奥三河のシカウチ神事(國學院大學・東栄町制作、平成18年・25年)
- ※ 共催：國學院大學・愛知県東栄町・ポーラ伝統文化振興財団(予定)

book book book book book book

照葉樹林

服部 保 著

沖縄県から青森県までの国内はもとより、大西洋に浮かぶカナリア諸島、中国、東南アジアと、照葉樹のある所、足を踏み入れざるはなしの照葉樹林研究第一人者の、42年に及ぶ研究の集大成。

目次をみると、「植生に関する用語(1)」「世界の植生、国内(日本)の植生(3)」「照葉樹林の種多様性(8)」「照葉樹林の植生管理(15)」など、日本の森を科学的に理解するために必要不可欠な知見が詰め込まれている。分布地図などはカラーで掲載され、大変見やすいのもありがたい。カミのすまう照葉樹林を学際的に見つめる社叢学会会員にとってはバイブルとも言えよう。(神戸群落生態研究会刊 頒価2,100円(送料込))

本書を入手希望の際は、①氏名 ②送付先住所 ③電話番号 ④必要冊数 ⑤振り込み金額 を、t.hattori810@gmail.comまで連絡の上、三井住友銀行フラワータウン出張所(普)3195829ヒョウゴシケンケンキュウカイ宛て代金を振り込まれたい。

京都 神社と寺院の森 京都の社叢めぐり

渡辺 弘之 著

京都にある約200の社寺の社叢に注目し、神木とされる巨樹・巨木、天然記念物に指定された樹木、伝承・伝説のある樹木などを紹介する1冊。

「社寺と社叢」と題された第1章は、社叢学会

事務局から

- 平成27年度(2015年4月～2016年3月)の会費の振替用紙を同封いたしました。払込には銀行振り込みもご利用いただけます。三菱東京UFJ銀行 京都支店 普通口座6720345 特定非営利活動法人社叢学会 理事長 藪田稔 です。また、銀行等から郵便局振替口座にお振り込み頂く場合は、099店 当座 0172640 特定非営利活動法人社叢学会 にお問い合わせいたします。
- 今年度の総会は、宗像大社の全面的なご協力の元で、大社のすべてをご覧になっていただくまたとない機会です。ぜひご参加ください。見学会等の参加費は、同封いたしました会費振替用紙の金額欄を修正してご利用ください。

会員ならば知っておきたい社叢の基礎知識が、わかりやすく説明されている。

が、なんとといってもこの書を中心となっているのは第3章「京都の社寺の樹木」だろう。50音順に、京都の社叢で見つかる樹木が、学名、科名、分布と共に、植物の性質のみならず、その樹木にまつわる伝説や、時には食味に至るまで、雑学も含めてふんだんなカラー写真で紹介されている。

最後には社寺のガイドマップと、そこにある樹木も記載した社寺一覧がついており、まさに「社寺めぐり必携の書である」(上田正昭・当学会名誉顧問の推薦文より)。(ナカニシヤ出版刊 定価1,800円+税)

いきものログ

「巨樹・巨木林ページ」公開中!

環境省生物多様性センターでは、全国の巨樹・巨木林の情報を提供・収集する「巨樹・巨木林ページ」を公開している。パソコンから調査データを検索・閲覧したり、巨樹の情報を登録したりすることができる。

いきものログのホームページ(<http://ikilog.biodic.go.jp/>)から「巨樹・巨木林調査をみる」へ。

問い合わせ：全国巨樹巨木林の会 TEL03-6659-6135 e-mail: kyojyu-web@jwrc.or.jp

編集後記

いやあ、面目ない。今回も「お詫びと訂正」をするハメに。。。しかも表紙だって! ゴメンナサイ。で、気を取り直して、っつか、取り直しようもないくらい収支決算がタイヘンなこと! 何回計算しても長い長いアシは短くならない。期待を込めて申請した助成金もダメだったしなあ。

もうこうなったら事務局長の減給しかない! タイドでかいし、「お詫びと訂正」体質からは脱却できないし。と殊勝にも理事会に減給(つても事務局週3日制も提案したから実質変わらないんだケド)を申し出たのに! アベノミクスに反するとか、事務局はちゃんと週5日開けるとか、敢え無く却下。はいはい、わかりましたよっつ。で、どうするわけ? 代案を出せ! (藤岡 郁)

お詫びと訂正

『社叢学研究』13号の表紙の目次の一部が間違っておりました。「資料紹介」の項、執筆者は前迫ゆり理事と事務局です。誠に申し訳ありませんでした。

発行人 社叢学会事務局 〒604-8115 京都市中京区雁金町373番地みよいビル303号
TEL075-212-2973 FAX075-212-2916
URL <http://www.shasou.org> E-Mail shasou@ams.odn.ne.jp

社叢学会関東支部 〒368-0041 秩父市番場町1-1 秩父神社社務所内
TEL080-1514-5032 E-Mail shasougakkai@hotmail.com
(当面、このアドレスでお願いいたします)



平成27年度年次総会の概要



参加ご希望の方は、5月20日(必着)にて、裏面申込用紙にご記入の上、FAXもしくは郵便にてお送りいただくか、同内容をMailにてお知らせください。

	時 間	内 容
5月30日(土) 見学会	9:30	JR鹿児島線東郷駅出発(専用バス：集合場所は後日お知らせいたします)
	9:45~10:45	宗像神社正式参拝の後、宗像大社辺津宮を拝観
	10:45	宗像大社出発、神湊港へ
	11:15	神湊出発、フェリーにて大島へ
	11:45~14:30	昼食後、宗像大社中津宮参拝、沖津宮(沖ノ島)遥拝所など参拝と島内見学
	14:40	大島出発、船で神湊へ
	15:00~	神湊着、バスで織幡神社へ。イヌマキ大木群見学後、辺津宮へ
	16:00~	神宝館を見学→自由解散
31日(日) 総会・研究発表・シンポジウム	9:00~10:00	海の道むなかた館展示・沖ノ島3D映像等自由見学
	10:00~10:55	年次総会 於：海の道むなかた館
	11:00~12:30	研究発表 <ul style="list-style-type: none"> ・大阪の神社境内樹木 増井啓治 ・モイドン(森殿)の緑地計画的意味に関する一考察 —鹿児島県錦江町周辺を対象として— 上甫木昭春 ・東アジアの「水」を巡る「伝統の森」の文化の資料化 ～山・河・里・海の「命」を繋ぐ水と森の文化誌的考察 李春子
	12:30~13:15	昼 食
	13:15~16:30	シンポジウム「森と海の文化 くらし・いのり・自然」
	13:15~14:15 14:30~16:30	基調講演 三輪嘉六・国立九州博物館前館長 パネルディスカッション パネリスト：森本幸裕・社叢学会理事・京都大学名誉教授 味酒安則・太宰府天満宮禰宜・学芸員 前迫ゆり・社叢学会理事・大阪産業大学教授 コーディネータ：櫻井治男・社叢学会理事・皇學館大學教授
16:45~18:00	懇親会	

★ 参加費(いずれもお1人)

	正会員・協力会員・賛助会員	市民会員	一般
見学会	5,000円	7,000円	8,000円
懇親会	3,000円		5,000円
シンポジウム	無料		500円

鎮守の森だよりvol. 75

宗像大社：福岡県宗像市の辺津宮・中津宮・沖津宮の三宮の総称。祭神は沖津宮が田心姫神(たごりひめのかみ)、中津宮が湍津姫神(たぎつひめのかみ)、辺津宮が市杵島姫神(いちきしまひめのかみ)の三女神で、古来、航海安全の神、海の神として崇敬されてきた。

辺津宮：海岸から釣川を約3km内陸部へ遡ったところに鎮座。広大な境内には本殿を中心に儀式殿、高宮祭場、第二宮(ていにぐう)・第三宮(ていさんぐう)、神宝館、祈願殿などが点在する。

高宮祭場：本殿裏手の小高い丘の上にあり、宗像大神

降臨の地と伝えられる。方形に組まれた石組みは、古代祭祀の形を伝え、滑石性形代や須恵器・土師器などが出土している。平成17年に高宮祭場での祭祀を復活、毎年10月3日に神奈備祭が斎行されている。

第二宮・第三宮：第二宮に沖津宮の田心姫神を、第三宮には中津宮の湍津姫神を祀る。伊勢神宮の第60回式年遷宮(昭和48年)に際して下賜された別宮の古殿を移築再建したもの。

神宝館：1954年からの3次にわたる学術調査によって沖ノ島の沖津宮祭祀遺跡から出土した奉獻品などを展示する。発見された奉獻品の総数は約12万点で、そのうちの約8万点が国宝・重要文化財に指定されている。また、中世文書や阿弥陀経石、石造狛犬などは、宗像一族の繁栄を物語る。更に日露戦争の帰趨を決した日本海海戦は沖ノ島至近の海域で展開されたが、この海戦を克明に記録した沖津宮神職の社務日誌や、東郷平八郎が奉納した戦艦三笠の羅針盤も展示されている。

★沖津宮：九州沿岸から約60km、玄界灘のほぼ真ん中に浮かぶ沖ノ島の中腹に鎮座。辺津宮の神職が1人で10日間、交代で奉仕する。住人はなく、女人禁制、上陸時の海中での裸、一木一草一石たりとも持ち出すことを禁ずるなどの掟が、いまでも厳重に守られている。学術調査ではササン朝ペルシアのガラス器や中国、韓国の金工芸などが発掘されたことから、沖ノ島は「海の正倉院」ともいわれている。

中津宮：宗像本土より沖合11kmにある大島の南西岸に、海を隔てて辺津宮と向かいあって鎮座する。大島は東西3.2km、南北1.7km、周囲15kmの福岡県で最大の島。境内には牽牛社、織女社があり、中津宮七夕祭は鎌倉時代まで遡り、七夕伝説発祥の地といわれる。島の北側には沖津宮遥拝所がある。

織幡(おりはた)神社：西日本の海女発祥の地として知られる鐘崎の、鐘ノ岬の一角に鎮座。地元民からは“シキハン様”の呼び名で親しまれている、現在、宗像五社のひとつに数えられ、延喜式(927年)には宗像大社に次いで朝廷の崇敬が厚かったと記されている。境内には 異国から運ばれ海底に沈んだとされる伝説の釣り鐘として引き上げられた大岩や、海女発祥の地を象徴する記念碑などがある。本殿を取り巻く「イヌマキ天然林」は天然記念物に指定されている。

海の道むなかた館：2009年1月にユネスコ世界遺産暫定リストに記載された「宗像・沖ノ島と関連遺産群」を紹介する施設。宗像大社に隣接する。「海の道」をテーマに、市内の遺跡から見つかった貴重な出土品や、「交易・交通・民衆の生活」に関する資料などで宗像の歴史の流れが展示されている。また、3Dシアターでは沖ノ島の3D映像を見ることができる。

----- 研究発表・シンポジウムと関連行事参加申込書 -----

FAX：075-212-2916

* ご希望の行事の()欄に○をおつけ下さい。同伴者がいらっしゃる場合は人数をお書き下さい。

() 見学会：同伴 人

() 懇親会：同伴 人

() 研究発表およびシンポジウム：同伴 人

会員番号

お名前

携帯電話番号・Mailアドレス等当日連絡先